

イケニエの羊だつて恋をする!?

プロローグ イケニエにされちゃったらしいですよ？

——どうやらわたし、社長にイケニエとして捧げられてしまったらしいですよ？

などと頭のなかで実況して冷静になろうとしたものの、七崎雨音はほとんどパニック状態だった。  
(おかしい。どう考えたっておかしいでしょ、コレえっ!?)

ここは現代日本。しかも、真っ昼間の会社の社長室。

イケニエなんて言葉が出てくるのは、ありえない。そう思うのに……

「イケニエのくせに、俺を無視して考えごとをするな。生意気だ。その大きな目でちゃんとこっちを見てろ、七崎。命令だ、命令」

傲慢な態度で言われ、声の主である端正な顔立ちの青年にコツンと頭をこづかれる。

「いや、だって社長、ななな、なんで!? この状況、おかしくくないですか？ それにわたし、今日中に作成しちやいた書類があるんですが、そろそろデスクに戻っていいですか？」

雨音がいまいるのは、ガラス張りのデザインビルの一室。

このあたりではひとときわ高いビルの最上階にあるその部屋は、柵や机などのインテリアが落ち着

いた色調で統一されている。オフィスというより、まるで高級マンションのモデルルーム。濃緑の観葉植物がアクセントになっていて、かなりお洒落だ。応接セットのソファは滑らかな手触りの革張り、座り心地もいい。

なぜその上質なソファの上で、雨音のような庶民が、青年社長に追いつめられているのだろう。就業時間中にもかかわらず、雨音はソファの背もたれと青年の腕に囲いこまれ、動くことさえままならない。少女漫画なんかで言うところの、いわゆる壁ドン状態。ソファの上だけだ。

「……おまえ、自分の身分を忘れたのか？」

「………………。身分なら、平社員以下で、試用期間中だったはずですが」

「その通りだ。よくわかってるじゃないか、平社員以下のイケニエ」

(だから、そのイケニエって、なんなんですか!?)

雨音が捧げられてしまった相手は、柊城雪也。

社員の間で暴君と噂されている、この会社の社長だ。その暴君の一言で、部下の配属も部署の存続も決まるというのだから、恐ろしい。順調に進んでいたプロジェクトも、「中止だ」と突然告げられ、過去に何人もクビになった者がいるのだとか。

もちろん雨音は、そんな相手に逆らう気はない。もう二十六歳になるし、社会のルールに従う分、別くらいある。なんといつてもいまは、正社員になるための大切な時期だ。社長の不興を買いたくないし、上司からは正社員登用されるような評価が欲しい。

そのためには多少の残業や無茶な仕事を頼まれても仕方ないと、覚悟していたのだけれど……

(さすがに社長へのイケニエにされるといのは、予想の斜め上すぎませんか!?)

これは無茶な仕事の範疇に入るだろうか。いや、なにか違う気がする。雨音はちよつとばかり泣きたくなって、唇を尖らせた。

「なんだ、その恨みがましそうな目は？」

「うう……だって社長、就業時間中にこの体勢は、おかしいと思いませんか？」

「この部屋にふたりつきりのときは、社長じゃなくて雪也と呼べ」

「………………。名前ですって……なぜに!? お、無理。それは無理ですよ! とうか、名前を呼び捨てにしたとたん、クビにしようとか考えてませんか？」

雪也を睨みつけたら、ゴツンとこぶしでこぶかれたあげく、頭をぐりぐりされた。痛い。

ますます恨みがましい気持ちで見上げると、雪也はやや色素の薄い目を細め、ふんと鼻で笑った。「イケニエのくせに口答えするなんて、生意気だぞ」

「うぐ……だって……」

「だって、なんだ。言ってみる。潤んだ目で睨みつけてくるその顔はかわいいから、ひとまず聞くだけは聞いてやる」

(うううう。かわいくなっていい。ひとまず聞くだけは聞いてやるとか、おかしい。イケニエなんて非現実的すぎる!!)

雪也の甘い顔が近づいてきて、頭は混乱するばかり。

その上、雨音がいま座っているソファは、社長室のなかでも特に高そうな一品だ。うっかり爪

も立てて傷つけたらと思うと、気が気じゃない。こんなところに囲いこまないでほしい。心臓がどきどきと高鳴るのは恐怖のせいだけでなく、社長の——雪也の顔が近いのも要因のひとつだ。

さつきから雨音の目は青年社長に釘付けになっている。だって雪也の高い頬骨と、すつと鼻梁が通った顔は、ちよつと日本人離れた格好よきなのだ。

雪也はクォーターだそうで、西洋人の血が少し混じっているらしい。その整った顔が間近に迫ってくるのと、勝手に雨音の胸が高鳴ってしまう。

(いやだから、ダメ。意識したらダメなんだってば、雨音！)

必死に自分自身に言い聞かせても、鼓動は速まるばかり。

彼から目を逸らすためうつむくと、今度はすらりと伸びた腕と足が目に入った。

雪也は背が高い。

一七四センチと女子にしては上背のある雨音より大きい、一八六センチなのだとか。しかもただ大きいわけではなく、肢体は均整が取れている。体のラインが美しく出るオーダーメイドスーツ姿が素敵すぎて、雨音はくらくらさせられてばかりだ。

とりわけ、立つて話しかけるときが危険だった。雪也に寄り添った状態でちよつと見上げると、その身長差にいつも雨音の心臓は跳ねる。

「……社長つてやつぱり、背が高い、ですよね？」

「そうか？」

「そうですよ！」

雨音は強く言い切った。

自分より身長が高い人にときめく。それは雨音の条件反射のようなものだった。けれども雪也に關しては、背の高さにときめくだけではすまなくなった。

腕時計を見るために腕を曲げるときの手の角度。ふと、ネクタイを緩める仕種。甘やかに微笑んだ際の、首の傾げ方——そんな些細なことが、いちいち雨音の好みにびったりで困るのだ。

いまも、つい雪也に見入ってしまう。そんな相手の腕に閉じこめられている状況で、どうしてときめかずにいられるだろう。

(いやいや、社長のことなんて別に、意識してないんだから！)

雨音は必死に雪也から気を逸らそうとした。

「あ、でも紀藤課長も高いか……おふたりが並んでいると、とても目の保養になります。いつもありがとうございます。でも見ているだけで充分なので、この体勢はいささか不意ですけれども」

「……不意とは失礼な奴だな。それに『紀藤も』ね。そうだな、あいつも身長は高いほうか」

苦い声と共に、雪也は体を前に傾けた。

ソファがぎしりと軋んで、どきりとする。

(あれ？ わたし、なにか機嫌を損ねることを言ったのかな？)

雪也のにこやかな顔が、心なししかめられた気がする。

なにかまずかったのだろうか——

たたりと背中に冷や汗が伝い、思わず饒舌になつてしまふ。

「あ、社長あの、わたし、いわゆるスケープゴートってやつなんですよね？ それでイケニエって、なにをするんでしょう？」

そう聞いたとき、ふわりと甘い香りがした。

（社長のオーデコロンの香り？ 眩暈が、しそう——）

くらくらと——まるで酒に酔ったかのように頭が上手く回らなくなる。  
なのに、なぜだろう。

同時にこの匂いを嗅ぐと心が安らぐ気がして、雨音は無意識に目を閉じ、深く匂いを吸いこんだ。  
「……罪を背負わされた山羊って意味のスケープゴートというよりは、神に捧げられたサクリファイスだと思うが。それとも俺が悪魔だったら、スケープゴートで間違いないか？」

そう低い声で囁かれて、ちゅつと耳元に口付けられた。

「ひゃっ……！ な、なに……！」

こそばゆい感触にはっと目を開くと、雪也にくすりと笑われる。

雨音はこんなことに慣れていない。恥ずかしさのあまり、かあつと耳が熱くなった。

「しや、社長つ、わたし、食べてもおいしくないですから！」

「それはどうかな？ 実際に食べてみないとわからないじゃないか」

にやりと口の端を歪めて笑う顔は意地悪そうなのに、雨音はなぜかときめきが抑えられない。

（違う。おかしい！ 感じるならせめて、恐怖に——！）

そう思うのに、火照りは増す一方で、しばらく冷めそうにない。

（そもそも私、新米の平社員以下なわけで！ 目立たず人の足を引っ張らず、ひっそりこっそり会社の片隅に居座る——へいへいぼんぼんな正社員を目指していたはずなのに！）

——どうして、こんな展開になつたんだろう？

雨音は混乱した頭で、必死に考えていた。

## 第一章 玉の輿は好きですか

ことのおこりは一ヶ月前にさかのぼる。

雨音は柘エレクトロニクスカンパニーに仮採用が決まり、はりきっていた。試用期間は三ヶ月。その間の働きに問題がなければ、正社員登用されるという。この不況時にせつかつかんだチャンスをついにするわけにはいかない。雨音は正社員になるために、慣れないながらも一生懸命働いていた。

エレクトロニクスカンパニー  
Electronics Companyの頭文字をとって、柘E・Cと略されるこの会社は、精密電子機器を扱っている。

精密電子機器といっても、その範囲は広い。家庭用の冷蔵庫からはじまり、医療用機器、新幹線の計量器械、あるいは最新のナノテクノロジーを使ったICチップまで。ありとあらゆる機器を取り扱う、大きな会社だ。しかも、柘E・Cが本社を置く桜霞市にとっては、ただの企業ではなかった。

桜霞市は、東京から新幹線で二時間ほどのところにある。

地方の中核都市にしては大きなビルが建ち並ぶ企業城下町だ。

中心部に位置するビルと商業施設のほとんどは、柘グループという財閥の企業で占められており、

街の経済を回している。住民はみな、なんらかの形で柘グループの恩恵を受けているのだ。

そんな柘グループの創業者一族は、みな「柘城」を姓に持つ。

いつてしまえば、柘城は桜霞市の支配者だ。

「柘城姓の人と話すときは気をつけたほうがいい」

弟の凧人は、転校初日に高校でそう警告されたらしい。

「万が一、柘城姓の人を怒らせると、親が職を失ったり、左遷されたり……。しかも、その話が広まると、ご近所との関係もギクシャクして、最悪この街に住めなくなるんだとか」

つまり村八分状態にされる。だから、この街で柘グループと柘城一族に逆らう者はいない。

なんて恐ろしい話だろう。

その話を聞いてから、雨音は街の人に接するときにはかなり気をつけている。

雨音は東京で生まれ、東京で育った。この三月に家族全員で引っ越してきたばかりで、桜霞市の

慣習には疎い。

しかもこれまで、一般的な会社勤めをしたことさえなかった。

大学を出てからは、父親が社長をしていた町工場——七崎機工で経理をやっていたのだ。

七崎機工は、少し人に自慢できる特許を持っていたものの、家族経営の小さな会社だった。立つて見渡せば誰がいるのかわかる、十二畳ほどの事務所。工場の人みんな顔見知りというアットホームな環境で、雨音は仕事をしていた。

もちろん、どんなに小さな会社で働いていたって、仕事は仕事だ。

でも、大きな会社に勤めるのはまるで勝手が違うと、柊E・Cに入社して実感した。社内でも毎日見知らぬ社員とたくさんすれ違う——それは雨音にとつて、初めての経験だった。もちろん、大企業のおえらいさんが街のどこかにいて、見知らぬ彼らに気をつけなければならぬ状況も。

勝手がわからない雨音は、初対面の人と接するたびに緊張していた。この人は「柊城」一族だろうか。なんの関わりもない人だろうか。怯えてチェックするその態度は異様だったらしい。

会社の先輩で同じ歳の佐々木はるか嬢に、  
「なんで人と会うだけで、そんなにびくびくしているのよ」

と呆れられてしまった。はるかか女子力の高いかわいらしい外見なのに、サバサバした性格をしている。だからバカにされたりしないだろうと理由を話したところ——

「柊城一族の人と道端で会うなんて、そんなにあることじゃないわよ！ 桜霞市で生まれ育った私だって、この二十六年間、狙っているのに一度も会えていないんだから！」

そして、えんえんと玉の輿願望を語られる羽目になった。  
「柊城一族の未婚の人に名前を覚えてもらえるチャンスがあるなら、絶対にモノにしてやるわ！」

（すごいです、さすがです！ 絶対真似できません！）  
はるかか意気ごみを前に、雨音はただパチパチと拍手した。

雨音はこれまで、玉の輿に乗りたくないなんて考えたこともなかった。  
目立たない、人の足を引っ張らない、人に名前を覚えられるような失態をしない。

平凡に地味に失敗なく生きるのが一番だ。直属の上司である課長に、プラスの評価をもらえれば、充分雨音はうれしい。

まずは、問題なく試用期間を終えて、平凡な正社員になること！  
それが雨音の目標だ。

とはいえ、引っ越してきたばかりの地で、慣れない仕事をしているせいだろう。  
気をつけて働いていたつもりなのに、配属されたばかりの風力事業開発部で失敗をしてしまった。

取引先に資料を送付する際、間違っって古いカタログを送ったのだ。取引先の担当者はずぐ間違いに気づき、電話をくれた。

資料は明日、朝一の会議で使うという。  
慌てて最新のカタログを準備し、届けに行くことになったのが夜の八時。

（自分の力で、どうにか失態をカバーしなくては！）  
雨音はそう決意して、課長に許可をもらい会社を飛び出したのだ。

そして無事にお使いを終え、会社に戻ってくると十時を回っていた。社内にはさすがに人気が少ない。大半の電気は消されて、薄暗い廊下を歩いているのは雨音ひとり。ちゃんと身分証を持っているのに、うしろめたい心地になるのはなぜなのだろう。人気がないところを歩いているだけで、咎められやしないかとびくびくしてしまう。

（不法侵入じゃないですよ？ ちゃんと入口でICカードを通してきましたからね？）  
心のなかで呟きながら、自分の部署に戻ってきた。いくつかの部署は無人がなっていたけれど、

風力事業開発部にはまだ灯りがついている。

「誰かまだ……仕事している?」

しかしパーテイションで区切られた区画のドアを開けても、同僚の姿は見当たらない。

そもそも雨音は出かけるとき、課長の紀藤から直帰の許可をもらっていた。

「戻る頃には多分、部署のみんなは帰ってるだろうしな」

紀藤のそんな言葉がよみがえる。

だが、帰りがけに取引先から資料を預かってしまったのだ。しかも社外秘マーク付。家に持ち帰るのは不安で、資料を置きに戻ってきたけれど――

「残っているとしたら、課長かな?」

そう当たりをつけて、奥の課長席に目を向けると、スーツ姿の人物がふたり。

そのうちのひとりはおそらく紀藤だろう。なにやらパソコンを覗きこんで、話をしている。雨音の帰社に気づいた様子はないが、声をかけないというのもおかしい。

預かった資料を自分のデスクに置き、挨拶だけしようと区画の奥にそっと向かう。こちらに背を向けているふたりは、パソコンで予定を組んでいるらしい。ウエブ上で予定を管理したり、ウエブサイトのページをスクラップして残せるアプリ――グリーンノートに書きこみをしている。

「おかしいな……これで合ってるはずなんだけど……」

「つて紀藤、いまのファイル、こっちのパソコンで開くと完全に文字化けしてるぞ。これじゃ全然意味がない……」

さらにふたりに近づくと、パソコンの画面が目に入った。

(部署のデータ管理の話しているのかな?)

「グリーンノートは海外のサービスだから……最新バージョンは、日本語だとバグが出やすいんですよ。ダウングレードしてみたらどうでしょう?」

気がつくくと雨音は、そう口にしていた。

それが運命の分岐点だったなんて、そのときの雨音は知る由もない。

雨音の声に、紀藤と仕立てのよきそうなベスト姿の青年は、ぱつと振り向いた。

「……………えーっと、ダウングレード……。最新バージョンじゃなくて、ひとつか、ふたつ前のバージョンに戻すと、バグが改善することがあります……よ?」

説明が不十分だったかもしれない。そう思っつけて足したけれど、なにやら空気がおかしい。

特に、見知らぬ青年の反応が微妙だ。なぜか威圧感を漂わせ、訝しそうに首を傾げている。

「あ、えーと課長、ただいま戻りました……?」

沈黙にいたたまれなくなっ帰社を告げると、「ああ、ご苦労だったな」といたわりの言葉が返ってくる。いやみでも義務的でもないやさしい声に、今日の失敗を気にしていた雨音は、ほっと胸を撫でおろした。少しだけときめいてしまいがら。

紀藤は二十九歳の若さで課長職についているだけあって、仕事ができるらしい。部署に来て日が浅い雨音から見ても、仕事熱心とわかる働きぶりで、今日のように残業もよくしている。

実際、紀藤がこの部署――風力事業開発部に来てから業績が伸びていると、はるか嬢に聞いた。



なのに、それを鼻にかけないところが素敵だと思う。仕事ができる人にありがちな厳しさはないし、指示も具体的でわかりやすい。帰りが遅くなるときには声をかけてくれたり、差し入れをしてくれたりと、細やかな気配りも忘れない。女の子たちの評判がいいのもうなずける。

もちろん、紀藤がもてるのは、仕事ができることだけが理由じゃないだろう。

顔立ちが格好いい部類に入るし、背も高い。繰り返し、背も高い。

一八六センチなんだって。

女子としては一七四センチと身長が高い雨音と並んでも、見劣りしない。雨音がわざわざ背を丸めなくたって、横に並んで女の子に見える。

背の高さは、雨音のひそかなコンプレックスだ。

学生の頃、少しいいなど思っていた男の子から「背の高い女は好きじゃない」と言われ、泣いたことがあった。望んで身長が伸びたわけじゃない。それになにをしたって背を縮めることはできない。心の傷は深く、いまだに膿んだままだ。

そんなわけで、身長が高いというだけで雨音は相手をいいなど思ってしまう。ましてや、紀藤は一流企業の若手の出世頭。性格もいいし、顔もいい。身長以外のスペックだって充分すぎるくらいだ。とりたてて狙ってまずとアピールしているわけじゃない。でも、紀藤と話すときに、ささやかな下心があるのは事実だ。

(紀藤課長って、やっぱり素敵だなあ……)

そんなことを考えながら紀藤の隣に目を移すと、雨音を訝しげに見ている青年も、すらりと背が

高かった。まっすぐに立ったときの目線の高さからして、一八六センチの紀藤とほとんど同じくらいの身長に見える。

(この人、誰だろう……?)

雨音がまじまじと青年を見つめていると、心なしか青年の目が驚きで瞪られた気がした。

(あ、はい。すみません。わたし背が高くて)

やや卑屈になり、心の中で呟く。こういう反応は珍しくない。もしかしてこいつ背が高い？ という疑いが、やっぱり背が高い！ という確信に変わるからだろう。

とはいえこちらにも、不躰に見ていたのは失礼だったかもしれない。そう思い、申し訳ありませんという気持ちをこめて苦笑いを浮かべると、不意に青年が口を開いた。

「……………紀藤、おまえのところは、こんなに夜遅くまで女子社員に仕事させてるのか？」

「いや？ 今日のはたまたま急なお使い頼んじゃったけど、普段はもう少し早い時間に帰してるぞ。」

なあ、七崎

「え、あ、はい。そうですね。こんなに残業したのは、今日が初めてです！」

紀藤の目線が賛同しろと言っている気がして、つい口走ったけれど——

(なんでこんな言い訳めいたことを、言わなくてはならないんだろう)

そんなことを考えていた雨音に、見知らぬ青年が傲然とした声で告げた。

「ふうん？ まあいいや。いまから帰るんだろ、送っていつてやる」

「はっ！」

雨音と紀藤が同時にあげた驚きの声を無視して、青年は近くの椅子にかけてあった上着を身に纏う。その仕種は妙に洗練されているように見えた。

(なに、この人——物言いは乱暴なのに、身のこなしはとてもスマートな感じ)

雨音は思わず目を奪われて固まった。すると、青年は苛立った様子で雨音を振り返る。

「おい、もう帰れるのか？ それなら、とっとと行くぞ」

立ち居振る舞いとは真逆の、傲慢な物言い。早く部署の出口に向かおうとする背中では、逆らうことを許してくれない雰囲気たたまを漂たわらせている。

(え、ちよっと待って。わたし承諾してないし。むしろイヤだし……どうしたら……)

雨音はとまどい、紀藤に助けを求めるように目を向ける。けれども、紀藤は首を横に振り、声を出さずに口を動かしたただけだった。

「さ・か・ら・う・な」

読唇術どくしんじゆつができない雨音にも、目の色と表情を見れば理解できた。

(いやいや。紀藤課長、見捨てないでくださいよ！)

雨音が再び目で訴えていると、まるで氷水のように冷ややかな声がかけられる。

「なにを固まっているんだ。俺だって暇じゃないんだ。ぼーっとしてないで、とっとと来い」

(暇じゃないんだったら、送っていただかなくて結構なんですが!!)

しかし、そんなことはもちろん言える空気じゃない。時計を見ればいつのまにか十時半になっており、家までの最終バスが出てしまっているのだけけれど……

(いや、でも、無理だって。自慢じゃないけどわたし、ちよっとばかり人見知りというやつでして、たったいま顔を見ただけの人と一緒に帰るとか、ホント無理ですから!)

「あいつ!」

やっぱり断ろうと口を開いたところで、体がぐんといきおいよく引っ張られた。

「あっ……!」

青年に右腕をつかまれて連行される。背後で紀藤が、どこか楽しそうな声をあげた。

「おお!」

動揺のあまり、雨音はぼくぼくと陸に揚げられた魚みたいに口を開け閉めしてしまう。

「た、助け……ッ」と掠かすれた声ですがろうとしたものの、無駄だった。頼みの綱の紀藤はひらひらと手を振り、「『苦勞さま』とねぎらいの言葉をよこしたただけだった。

十 十 十

なんなのなんなのなんなの——!?

「家はどっちだ?」

「あ、え、や……え、駅の近くで降ろしてもらえれば、それで!!」

高そうな左ハンドルの外車。

ベンツやBMWではなく、雨音にはまるでわからないマークがついた車だった。

こんな車に乗ったのは初めてだ。はつきり言つて、落ち着かない。  
 (高級外車に乗つて、素性のよくわからない人に家を知られるとか……やっぱりない！ 適当なところで降りてもらおう！)

ひそかに決意したとき、ふわりと香水のような匂いがして、なぜかふつと肩の力が抜けた。くらりと眩暈を誘うほど甘いその香りは、どこか懐かしい。

(なんの、香りだろう——?)

不思議に思つていると、なだめるように頭をぼんと叩かれ、香りが強くなる。

(この人がつけているオーデコロンの匂いだ)

そう気づいたのは、髪をくしゃつと撫でられたあとだった。

「え？ と、ええっ!？」

髪の毛に指を入れられたのは、信号待ちの短い間だけ。両音が動揺している隙に、するりとやさしい感触が離れていく。

「馬鹿、遠慮するな。駅の近くじゃ、わざわざ車で送つてやる意味がないだろ。道案内ができないなら、最寄りのバス停を言え」

「あ、すずかけ通り！ すずかけ通りです！」

人を従わせる物言いに、とつさに口走つていた。

どうやら両音が住所を言いたがらないのは、遠慮しているからだと思つたらしい。

(多分、悪い人じゃ……ないんだよね?)

そう思つて青年に目を向けると、鼻梁と頬骨が高く、とても端正な顔立ちをしている。

(もしかしくても、この人すごく格好いいんじゃない?)

さつきは訝しげな表情ばかりが気になって、顔立ちに目がいかなかった。あるいは無意識に警戒していたのかもしれない。甘やかな顔立ちは、人をはからかつて弄ぶのが好きそうな印象を受ける。

けれども、ときどき対向車のヘッドライトに照らされる横顔は、ずっと見つめていたくなる穏やかな雰囲気か漂つていた。

(……うん。この横顔はちよつと——素敵)

そんなことを考えている間に、車が交差点を曲がる。

目的地のバス停——すずかけ通りが近づいてきた。

(どうしよう。もうすぐバス停だし、止まってくださいつて言つたほうがいいかな……でも)

両音の家はもうちよつと先だ。バス停からだ、少し歩かなくてはいけない。

さつきまでは、家まで送ってもらうなんてとんでもないと思つていた。けれども、夜の十一時近い新興住宅街を目の当たりにすると、心が揺らいでしまう。

夜のこぎれいな住宅街は、人氣がなくてちよつと怖い。

でも、初対面の人に家を知られてしまうのも、怖い気がする。

(どうしよう——どうしよう……わたし)

ひとまず呼びかけようと思つて、はたと気づいた。

「あ、あの……そういえば、名前……名前、おうかがいしてませんでしたよね？」

「……………。そうだな」

「お名前……は？ あの、おうかがい、しても？」

「……………。名前」

「そう、名前」

(なんだろう、この沈黙)

見知らぬ人に会ったとき、名前を聞くのは普通のことではないのか。

それともこの人にとって、それは失礼なことなのだろうか。

でも一度口に出した言葉は、なかつたことにはできない。

雨音がぐるぐる思いを巡らせていると、ふうと息を吐く音が狭い車内に響いた。

「雪——雪谷聖夜だ。友人からはユキヤって呼ばれてる」

ユキタニ——雪谷と書くのだろうか。

(うん、とりあえず柵城姓じゃないし、大丈夫そう……よかった)

雨音はそこで安心して、素直にお願いすることができた。

「あの、ユキタニさん。その交差点を右に曲がって、少し先までお願いしてもいいでしょうか」

「もちろんですよ。お嬢さん」

くすくすと笑われた。その横顔に、どうして雨音が「家まで」となかなかお願いできなかったの

か、すべて見抜かれている気がした。

(なに、その芝居がかった言葉！)

普段の雨音なら、嫌悪感もあらわに顔をしかめるところだ。なのに目の前の青年があまりにも自然に口にするから、ちよつといい気分になってしまう。キザなセリフに顔が熱くなるのを、どうすることもできない。

(いま、暗くてよかった……顔が赤いのを見られたら恥ずかしい。男慣れしてないと思われるかもしれない。いや、実際、慣れてないんだけど！)

雨音は気づかれないようにそつと深呼吸すると、必死に何気なさを装って話しかける。

「ユキタニセイヤなんて、まるでクリスマスに生まれた人みたいですね」

「そうだな。実際クリスマスイブ生まれだ」

「あ、やつぱりそうなんですか！ 名前で誕生日を人に伝えられるなんて、素敵ですね。それに、いっぱいプレゼントをもらえそう！」

「…………。そうか。そういう考え方も……確かにあるな。そうでなくても、周りには誕生日が知られたっていたが……」

「知れわたっていた？」

「いや、比較的……そう、比較的。小学校からずっと、変わりばえのない人間関係のなかで過ごしてきたからな」

「なるほど……あ、そこです。あの駐車禁止の標識の前の家です」

ききつと軽いブレーキ音を立てて、車が止まった。

二階建ての新しい家は、家族四人で住むには充分な広さだ。玄関に点る灯りを見て、雨音はほつ

と息をついた。まだ少ししか住んでないけれど、すでにここが我が家になっているようだ。無事に家に着いて、緊張が解ける。

雨音はシートベルトを外し、「ありがとうございました」と頭を下げた。そうしてすばやく車を降りると、なぜかユキタニセイヤも車を降りた。

「ナナサキ——七崎、雨音だったか？」

門に掲げられた表札を長い指でなぞり、彼は確認するように尋ねてくる。

「あ、はい。そうです」

笑顔で答えたところで、あれ？ と疑問が頭をかすめた。

（確か、紀藤課長に名前を呼ばれた気がするけど……下の名前まで言ってたっけ？）

「……そうか。遅くなったが、親御さんに挨拶しなくて大丈夫か？ 仕事で遅くなったって、俺がらちやんと伝えたほうがよくないか？」

「と、とんでもない！ だ、大丈夫ですから！ というか、こんなスゴイ車で送ってもらったって親に知られたら、それこそ無用な心配をされてしまうかも……！」

慌てていらいなことまで口走った気がするけれど、事実には違いない。心配してくれるにしても、ちよつと過剰だと思う。

（東京にいるときは、夜の十一時くらいに帰ることはざらにあつた。今日は遅くなるってメールしたから、親はさして心配してないはずだし）

むしろ、挨拶なんてされたら困る。

お洒落なスーツをさらりと着こなした青年。しかも外車乗り。

そんな人がやってきて、「遅くなったのは会社都合の残業です」だなんて、怪しすぎる。そうでもなくても庶民的な我が家の前に、流線形の美しいフォルムをした外車が停まっている光景は、はつきり言つて浮いているのだ。

「送っていただいただけで、充分です！ 車から見てて思ったんですけど、この時間はやつぱり人氣がなかったから……とても助かりました。ありがとうございました！ おやすみなさい！」

ひと息にお礼を言つてのけると、やつと胸のつかえが取れた気がした。

（言えた……ちゃんとお礼、言えた）

車に乗りこんだときは緊張しすぎて、気分が悪くなりそうだった。なのに、乗っているうちに慣れてしまうなんて、自分でもちよつとびつくりだ。初対面の人からの親切すぎる申し出を怪しんでしまったけれど、雨音が神経質すぎたのかもしれない。最初に感じたあの訝しげな視線も、多分、青年にしてみれば、深い意味はなかったのだろう。なんでこんな遅い時間にOLが残ってるんだという、ごくごく一般的な疑念の表れだったに違いない。

（だって、女子社員どころか男子社員だって、いない時間だったもんね）

雨音はそう思い、にこにこしながら、ユキタニが車に乗るのを待っていた。

青年は考えこむように少し首を傾げたあと、にやりと人の悪い笑みを雨音に向ける。

「……ああ、おやすみ。七崎雨音……また、明日な」

「え？ あ、さよ……ならっ？」

(なにかいま、含みのあることを言われた気がしたけれど、気のせい……よね?)

雨音は気づかなかつたふりをして、軽く手を振った。その間にユキタニは車に乗りこんでエンジンをかけ直し、雨音に挨拶するようにヘッドライトを点滅させた。やがて聞き慣れないエンジン音を立てて、美しい車体が遠ざかっていく。

(ユキタニセイヤさんかあ……。あんな時間にいたんだから、会社の人だよな? 初めて会ったな……。といっても、他の部署の人なんて会ってもわからないんだけど)

「また、会えるかなあ?」

雨音はのんきに吹き、ユキタニの車のテイルランプが見えなくなるまで見送った。

十 十 十

初めて会った人に、家まで送ってもらおう。

しかも「ドナドナ」の仔牛のごとく、連行されて――

そんな事態が発生した翌日。

ちよつと朝寝坊したけれど、それ以外は通常通り。雨音は定時十分前に出社し、普通に仕事をしていた。

昨日は帰るのが遅かったから、寝不足気味で体がだるい。とはいえ、雨音は風力事業開発部ではまだまだ新米で、ほぼ戦力外。基本的に頼まれた仕事をこなしているだけなので、業務が辛いとい

うこともない。

配属されて十日ほどで、キーボードを打つのはそこそこ速いと思われたようだ。おかげでこのころ、パソコンで書類を作成する業務を主に任されている。

一番多いのは、試作品の実験結果をグラフにしたり、手書きの草稿をパワーポイントのデータにしたりする仕事。他には社内の共有ソフトを使い、部署の経理書類をまとめて経理課に送っている。一見ささやかだけれど、どれも意外に時間がかかる。作業に没頭していると、午前中はあつというまにすぎた。

奇妙なことが起きたのは、あと二十分でお昼休みになる――そう思ったときだった。

「おい、七崎」

「は、はい!」

名前を呼ばれて、パソコンの画面を見たまま、びくりと反射的に返事をする。

知らない声だなど思いつつ肩越しに振り向くと、洒落なスーツを着た、昨夜の青年が立っていた。夜に見たときも、スーツに包まれた体のラインが綺麗だと思った。明るい場所では、すらりとし身長が高い姿は堂々としていて、より格好いい。

少し癖つ毛なのだろうか。動くとき茶色がかつた髪が揺れて、くるくる踊っている。

ユキタニは一見しただけでも部署の男性社員とは違っていた。人を威圧する雰囲気は漂わせ、そこにいるだけで人を惹きつける。そんな強い存在感を放っていた。

「あ、昨日の……。ユキタニさん。昨夜はどうもお世話になりました。ユキタニさんのほうはあんな

に遅い時間におうちに帰られて、問題なかったですか？」

「雨音は立ちあがって、ぺこりと頭を下げる。それは遅い時間にわざわざ送ってもらったという申し訳なさから出た言葉だった。けれども、周りの人には、どうやら違う意味に聞こえたらしい。心なしか部署のなかがざわつく。

「昨夜？ いまあいつ、昨夜って言ったか」

「いやまさか。そもそも、いつ知り合いになる機会があったんだ？」

「そんなとまどいの言葉がひそひそと交わされる。とはいえ、雨音は青年に気をとられていて気がつかなかった。

「ああ。別に……車だったし」

「そう言った彼は仏頂面ぶつどうめんをしている。

「どこか拗ずねているようにも見えて、雨音は思わずくすりと笑ってしまった。

「こんなに背が高く格好いい人なのに、なんかちよつとかわいい……かも？」

「おい、なんで笑ったんだ？」

「いえ、なんでも……あ、そういうえば紀藤課長に用事ですか？ いまちよつと席を外しているみたいなんですが……」

ユキタニの頬にさつと赤みが走ったのは見なかったふりをして、雨音は話題を変える。整った顔立ちに、高い身長。そんな好条件の青年が顔を赤らめている姿は、なかなかの破壊力がある。まっすぐ見てしまうのが怖いくらい。

「紀藤には、いまそこで会って、これから出かけるって言うておいたから、もう用事はない。昼を食べにいくのに誘いに来ただけだ。君は、昼はいつもどうしてる？」

「なんとなくぶつきらぼうな口調に感じるのは、気のせいだろうか。

「(まるで慣れないことでもしているような……?)」

「雨音は首を傾かげたけれど、つっこむほど親しくもない。疑問は心のなかだけにとどめた。

「あ、いつもはお弁当なんですけど、今日はちよつと朝寝坊あさねぼうしてしまつて……コンビニに出かけて、なにか買ってこようかと」

「そうか、それなら都合がいい。行くぞ」

「は？ あ、や……まだお昼休みじゃな……」

「強引に手を引かれ、雨音はとっさに抗あひがった。

「(昼休みになる前に出かけるなんて、誰かが、きつとなにか言うはず……)」

「そう思つて部署を見渡すと、まるで追い払われるように、一斉に手を振られた。しかも、すぐ近くにいる男性社員は、声を出さずともあきらかに「行け」と言っている。

「(まだ就業時間なのに、どうということ?)」

「困惑しつつも、同僚に見送られてしまえば、どうすることもできない。

「断れずに、廊下を引きずられるようにして歩く。

「ときおりすれ違う人々の視線に、憐あはれみのようなものを感じるのはいらぬだろうか。

「(ユキタニさんって、もしかして営業さんなのかな？ 外回りの人は就業時間にかかわらず、お昼

を食べにいくことが多いって、はるか嬢が言っていた気がするし。いいのかな……?)

どことなく逆らうのが怖くて、すつと姿勢の美しい背中についていく。

(男の人の広い背中……肩胛骨の動きでスーツに皺が寄るのって、なんか好きだなあ)

雨音はすっかりユキタニの背中に見蕩れていた。すると、進行方向から背の高い男の人が近づいてくる。見慣れた背格好に整った黒髪。紀藤だ。

「あ、紀藤課長……あの、わたし……」

お昼休み前に出かけることを伝えようと口を開くと、からかうような紀藤の声に遮られた。

「ふーん……そうなんだ」

「なんだ？」

意味ありげに言う紀藤に、不機嫌そうに答えたのはユキタニだ。

「ああ、いやいや。お昼行くんだろ。いつてらっしやいー」

言い訳もまだだというのに、ひらひらと手を振られ、笑顔で見送られてしまった。

部署の長である紀藤に送り出されてしまうと、もう逆らう理由がない。それに、この状態で「まだお昼休みではないので、行けません」とは、もはや言い出せない。

昨夜に引き続き、雨音は今日も半ば強制的にユキタニに引きずられていく。

頭のなかで、「ドナドナ」の歌が流れます。雨音は諦めて、市場に売られる仔牛よろしく連れていかれるしかなかった。

ビルの中心部にあるエレベーターに乗りこみ、雨音が観念したと思ったのだろう。ユキタニが雨

音の腕を離してくれて、ほつとする。狭い空間にふたりきりというのは、別の意味で困ったけれど。

チンという軽い音がして一階に着くと、エントランスホールはとても静かだった。

まだお昼前だからだろうか。吹き抜けのエントランスには、就業時間中特有の緊張感が漂っている。エントランスの真ん中には受付があり、出入り口を通るときに、受付嬢からちらりと訝しそうな目を向けられた気がした。

怪しむような——あるいは羨望が入りまじったような視線に感じるのは、自分がそう思いたいからかもしれない。

(だって——こういうの、ちょっと懂れていた)

隣を見上げれば、スーツ姿の素敵な男性。

普段、口にするのではない。けれども、道行く人の目を惹くような男の人と連れ立って歩くことができた——。そんな妄想をずっと抱いていた。

(しかも自分より背が高くて、こんなに格好いい人から誘われるなんて……ちょっと気分いい)

雨音は浮かれて、思わず、くふと相好を崩した。

ドナドナめいた強引な誘い方や、同僚や見知らぬ社員から向けられた好奇の視線には、抵抗があった。でも、その抵抗感を差し引いても、この身長差の男性と歩けるのはうれしい。少しでも気を抜くとすぐ頬が緩んで、そのたびに我に返って表情を引きしめなくてははいけなくらい。

雨音は表情をこころと変えながら、ユキタニをちらちら横目に見てしまう。その視線に気づいてはいないのだろうか、ユキタニは少しぼつの悪そうな顔で切り出した。



「いきなり連れ出して悪かったな。昼だが……一応、聞いておく。行きたい店とかあるか？」  
「え？ あ、えーとすみません。実は引越してきたばかりで、まだこの辺りに詳しくなくて」

「じゃあ、勝手に決めていいか？ なにか食べられないものは？」  
強引な割に、意外と細かい気遣いをする人なんだな。

両音は妙に感心しながら、にっこりと笑みを返した。

「えーと、しゃことゲテモノ系は苦手なんですけど、基本的に食べられないものはないです！ おまかせしちゃっていいですか？」

その言葉に、ユキタニがはっと目を睜<sup>みは</sup>る。その一瞬の変化を、両音は見逃さなかった。  
(いま、なんでこの人、驚いたんだろう?)

そう思いつつも、両音はユキタニに目を奪われた。日光の下で見ると、ユキタニは髪の色が茶色がかったただけでなく、瞳の色も少し薄いのがわかる。

(あ、だからかな。この人、ちょっと日本人離れた顔立ちに見える。雰囲気と合ってるな)

思わず両音は、ユキタニの顔に見入ってしまった。とはいえ、ユキタニの目元にさつと赤みが差したことは気づかなかつたのだが。

「ユキタニさんで、目と髪の色素が薄いつて言われませんか？ あ、変って意味じゃなくて……その、綺麗だなんて思つて」

「そうか。綺麗……かな？」

「え、あ、はい？ えっと、あんまりうまく言えないんですけど……。スーツの感じとか、身のこ

なしとか、そういう雰囲気とすごく合ってます」

「………………。へえ？ そうなんだ」

(あれ？ なんかいま一瞬、空気がおかしかった?)

口調は穏やかだったけれど、どこか冷ややかな声に感じた。

(なん……………だろう)

気になって、いま一度、ユキタニを覗<sup>のぞ</sup>きこもうとしたところで、足元ががくんと崩れた。

「わ、あっ！」

上ばかり見て、足下の注意力がおろそかになっていたらしい。

歩道のブロックが割れているところで、つまずいたようだ。

転ぶ。痛い！

そんなことを考えて、衝撃を覚悟した——それなのに、いつまでも痛みはやってこない。かわりに、がっしりと力強い手に腕をつかまれていた。しかも、もう片方の手で腰を支えられて。

(わわっ、腰、腰に手を回されてっ！)

顔がぼっと熱くなるのを感じ、逃れようとしたところで、またもバランスを崩した。

「七崎、不注意だつてよく言われるだろう……」

しっかりと立つように体を支えられると、頭のすぐ上で呆れた声が聞こえる。

(すぐ上でつて……ナニゴト!? それよりなんでこんなやつ!?)

頭のなかで問いかけても、状況は変わるわけではない。

「雨音は抱きとめられていた——広い道の真んなかで。

「光栄だな。こんなところで、かわいい瞳で熱烈に見つめながら、胸に飛びこんできてくれるなんて」

耳元で甘やかに囁かれて、心臓が跳ねる。

急に息苦しくなつて、ぞわりと得体の知れない感覚が体に走る。

「な、や……ね、熱烈に見つめてなんかっ！　じゃなくて、ユキタ二さんが、その、目とか髪とか、綺麗だから、そのっ」

「熱烈に見つめちゃったんだ？」

「ち、ちが……っ」

——言い訳をしようとしたとき、ユキタ二と目が合つて固まつた。

雨音はすっかり混乱していた。彼が意地悪そうに微笑む顔があまりにも魅惑的すぎて、息ができない。目が離せない。昨夜も感じたオーデコロンの香りがふわりと鼻をくすぐり、頭の芯が甘く痺れた気がした。

この状況を『熱烈に見つめて』と言わないのなら、なんと呼べばいいのだろう。

頭の片隅で冷静にそんなことを考える自分もいる。

「ユキヤ。ユキヤつて呼んでほしいな」

「……え？　えと……ユキタ二だから、ですか？」

雨音の問いかけに、茶色がかつた癖毛を揺らして、ユキタ二は甘やかに微笑む。

どこかからかうようできて、人を魅了する笑顔。

目が釘付けになりながらも、雨音の冷静な部分は、おかしい！　と叫んでいた。昨夜会ったばかりの人をこんなに見るのは失礼だし、真つ昼間の歩道で抱きしめられている状況も非日常すぎる。

しかも、あだ名で呼ぶなんて考えられない。なのに、「雨音はユキタ二の顔から目が離せない。

「そう、なんだ。ユキタ二つてちよつと言いくいだろ？　だから親しい人にはユキヤつて呼んでもらつてるんだ。だから……ね？」

おねだりするような物言いに、思わずうなずいてしまいそうだった。けれども、やっぱりおかしい。頭のなかで、警鐘が鳴っている気がする。

「親しい人つて……えと、わたし、ユキタ二さんとは、昨夜会ったばかりなんですけど？」

「あ、そういうこと言うんだ？　じゃあ昼休みにどつと人が出てくるまで、このままでいいよか？」

「は？」

にっこり微笑んで——脅された。

いやいや、それは確実にヤバイ。

十二時前のいま、片側二車線の広い道路は、人影がまばらだ。街路樹の向こうを通りすぎる人は、雨音がユキタ二に抱きとめられていることに気づく様子はない。

けれども十二時になれば、あたり一帯のビルからわらわらと人が出てくるのを雨音は知っている。お昼を外で食べることはあまりないけれど、人が蠢くありさまをビルの上から毎日眺めていた。

柵グループのビルが集まるこの区画は、お昼のチャイムと共に「どこから湧いてきたんだろう？」

と首を傾げたくなるくらい、大勢の人で溢れる。

「どうする、七崎？ あ、そうか。名前で呼んだほうが親しいかな？ どう思う？ ——「雨音」低い声で囁かれ、腰のあたりにざわつと得体の知れない感覚が走る。

のどの奥が熱くなり、雨音はなにも考えることができずにユキタニの腕にしがみついた。  
(立って、いられない——)

ぎゅつと彼のスーツをつかんで、体に走る波が早く通り過ぎますようにとひたすら祈る。  
なにが起きたのか、よくわからなかった。ただ名前を呼ばれただけなのに、頭も腰も蕩けてしまったかのように力が入らない。

「な、名前、呼ばないでくださいっ」

「なんで？ あ、十二時十分前……どうする？ このままここにいます？ 選んではせてあげよう」

ユキタニはくすりと笑いながら言う。手首の腕時計を見ているのだろう。腕を曲げて覗きこむ仕種さえ、さまになる。目の保養だけれど、人を追い詰める言葉を吐いたあとに、そんなにやさしく微笑まないでほしい。まるで人が変わったような笑顔に、くらくらと眩暈がしてしまう。

「ユキヤ……さん……って、よ、呼びますから、や……。もお、離して、ください……」

必死に声を絞りだせば、頭の上でくすくすと笑われた。

「なんだ、もう陥落？ ……つまらないな。でも、よくできました」

そう言つて髪を撫でられると、またざわりとした震えが背中を駆けあがる。

得体の知れない感覚が怖い。それなのに、ユキタニ——ユキヤの体が離れていくのが、なぜか淋

しい。そう思ったことに、気づかれたのだろうか。ユキヤは雨音の手をとって歩きだした。雨音の顔は火照つたまま。きつと真つ赤に違いない顔を隠すために、うつむいて歩く。

その間も、ざわざわと心が動く気配は止まらなかった。

十 十 十

ユキヤが案内してくれたのは、高級そうなステーキ店だった。

ステーキ店というと、雨音はファミレス系列の店にしか行ったことがない。家族連れでにぎわう店内に、鉄板で肉を焼く音やソースの跳ねる音が溢れる——そんなイメージは軽く裏切られた。

「ここでいいかな？」

「白菜瀬」という和風の看板を指差して尋ねられたものの、店先に漂う高級感にとまどう。とはいえ、さつきおまかせしめすと云ったばかりで、ノーとは言えない。雨音は覚悟を決めてうなずいた。  
「いらつしやいませ」

店に入ると、白いシャツに黒いエプロンを腰に巻いたギャルソンが案内してくれた。レジカウンターを通り過ぎたところで、品のよい内装に目を奪われる。

数寄屋造り風の店内には、インテリアとして洋風のテーブルや洒落た織物のソファがセンスよく置かれている。艶やかな緑の観葉植物が癒しの空間を、ところどころに点る間接照明が暖かみを演出していた。

素敵なお店だと思ふのと同時に、高そうだと緊張してしまう。

(正直言つて、わたし、場違いな気がする……。お金、足りるかなあ……)

雨音は怯えながらも、ユキヤのあとをひよこひよこついでいく。

そもそも店名からして、洒落ている。〇〇ステーキハウスとかじゃない。

カウンター席にユキヤと並んで座り、渡されたお品書きだつて、花の紋が入った和紙に流麗な墨書き。ステーキ店というより、むしろ料亭の趣がある。支払いはなんとか手持ちで足りそうだ。よくわからないから、メニューもおまかせすると、ランチメニューを頼んでくれた。

「肉の焼き加減は、レア？ ミディアムレア？」

「あ、じゃあミディアムレアをお願いします」

ステーキは高い店ほどレアで頼んだほうがいいと聞いたことがある。けれどもレアだと生すぎるから、雨音はミディアムレアを選ぶことが多い。

「ん、じゃあ、ふたり分、ミディアムレアで」

そう言つてユキヤも同じものを頼んだのが、なんだかうれしかった。

注文した料理が出てくるまで、カウンター席の一角、大きな鉄板の前で、ふたり並んで座つて待つ——それはいいのだけれど、雨音は店内や隣のユキヤを見て、そわそわしはじめた。

(わたしのこのOLっぽいスーツ姿つて、なんか浮いてる……)

隣に座るユキヤはお洒落で、落ち着いた雰囲気の内にもなじんでいるというのに。

「どうかしたのか？ あ、匂いがつくのまずかったか？」

「あ、いえ。そういうことではなくてですね！ わたし、ユキヤさんみたいに洒落たスーツじゃなくて、二組一萬円の既製服なモノで、ちょっと……お店と合つてないなあって思つてですね」

「は？ 服？」

(う。やつぱり呆れられた……。二組一萬円だから、しょうがないけど)

恥を忍んで告白したけれど、情けなくて泣きたくなる。

「……そんなに服が気になるなら、デートに誘うときは、服を贈らないとダメかな？ サイズを聞いてもいい？」

ユキヤは少し首を傾げて、雨音の機嫌をうかがうように微笑んだ。とたんに、心臓がとくと大きく跳ねて、顔に熱が集まる。この熱は、けつして目の前の鉄板が熱いせいじゃない。

(し、静まれ。心臓。この人にとって、こういう会話は日常茶飯事なのよ、きつと！ というか、デートに行くのにまず服を贈るつて、どんだけハイソサエティな考えなの……ありえない！)

半分パニックになったところで、はたと気がつく。そうだ、これはきつと冗談なんだ。

雨音はそう結論づけた。とはいえ、会話の流れを断ち切ることも、怖くてできない。

だからつい素朴な疑問を口にしてしまった。

「ユキヤさんつて、ただ正社員というだけじゃなくて、セレブなんですねえ。デートのたびに女性に服を贈ったりするんですか」

「セレブ、ねえ……雨音はおもしろいことを言うんだな」

ガタンという物音に振り向くと——どうしたのだろうか。飲み物を運んできたギャルソンが、空

いたテーブルにトレイを置こうとして手を滑らせたらしい。

「し、失礼いたしました」

丁寧な頭を下げるギャルソンは、あきらかに動揺している。

(なんだろう?)

よくわからないまま首を傾げていると、ユキヤの色素の薄い瞳と視線が絡んだ。

「雨音? 嫉妬しつとしてくれたんならうれしいけど、他の女に服を贈ったことなんてない。こんなことを言ったのも雨音が初めてだけ?」

どう? と流し目で見つめられ、雨音は今度こそ頭が沸騰ふっとうしたかと思った。もう熱いとか熱くないとかいうレベルじゃない。恋人でもないのにこんな甘いセリフを言われるなんて、ありえない。他の女に服を贈ったことなんてない——ユキヤはそう言ったけれど、雨音だって、女として生きてきて二十六年間、こんなことを言われたのは初めてだ。

大学生のときには、友だちの紹介でつきあつた人もいたけれど、すぐに別れてしまった。

『君ってちよつと、天然入ってるよね』

そんな言葉で振られたあとは、いいなと思う人にさえ出会うことがなかった。

『いいなと思う基準が、身長の高さだからいけないのよ! 身長一八〇センチ以上の人なんて条件にしてたら、アンタ嫁いき遅れるわよ!』

友だちはそう心配してくれるけれど、ほかにどんなところで自分の心が動くのかわからないから、どうしようもない。あるいは友だちの言うとおり、このままずっと独身なのかも——

そんなふうを考えていたとき、桜霞市に引越すことになった。

新しい街で就職してみれば、配属された部署の若き課長は背が高く、独身だった。紀藤と話をすると、ちよつとドキドキしていたのは確かだ。もつとも、残業してまでがんばっている一番の理由は、正社員になりたいからなのだけだ。

そんなある日、雨音はまたも理想の身長差の男性と出会った。

その上、甘い言葉まで囁ささかれるなんて——

(絶対、冗談に決まってる。だってこんな素敵な人なんだし……。私が初めてだなんて言ったけど、他の女性に服を贈った話なんて、目の前にいる相手に普通しないもの。昨夜だって、さらっと家まで送るなんて言ってくれたし。慣れてるんだ、きつと。きつと、そうに決まってる)

「えつと、冗談はさておき、そろそろお腹空きましたね」

雨音はユキヤの言葉を聞かなかつたことにして、鉄板に視線を移した。

そのとき、新しい客がおおぜい入ってきて、話し声が広い店内に響く。

「……別に、冗談じゃなかつただけ」

にぎやかな音に掻かき消され、ユキヤの小さな呟つぶやきも、身なりに合わないちつという舌打ちの音も、雨音の耳には届かなかつた。

じゅ、と心地よい音を立てて焼かれる和牛肉の香りに、食欲をそえられる。

前菜やサラダを食べる間に、シェフが厚さ二センチもある肉を大きな鉄板で焼いてくれる。しか

も見事な手捌きでコテを操り、肉を焼く合間をぬって、醬油味のもやしを炒めて出してくれた。雨音が思わず見落れていると、雪也がおもむろに問いかけてきた。

「そういえば、雨音はこの辺に慣れてないって言ってたけど……いつ桜霞市に来たんだ？」

「ちよ、名前呼ばないでくださいってお願いしたじゃないですか！……来たのは、二ヶ月くらい前ですよ」

「二ヶ月前……それで一ヶ月前にうちの会社に採用された、と」

「あ、そーなんです。職が見つかって助かりました。こんな大きな会社に勤めるのは初めてで……わけのわからないことばかりなんですけど。とりあえず仮採用だって言われているので、三ヶ月の試用期間が終わったときに、ちゃんと正社員登用してもらおうのが夢です！」

自分で言っておきながら、なんて平凡な夢だろうと思う。

とはいえ、この不況時に正社員になるチャンスをもたらえるだけで、ありがたい。誰に話したとしても、「じゃあ、がんばれよ」の一言で終わる、ごくごく普通の話だろう。少なくとも雨音としては、ほんの世間話のつもりだった。なのに――

「へえ……三ヶ月の試用期間か。じゃあ、あと二ヶ月残ってる計算になるな」

にやりと片方の口角を上げて笑うユキヤを見て、ぞくりと背中に悪寒が走る。

なぜ、そんな畏れにも似たものを感じたのだろう。特別な感情を抱かせるような――問題がある話の流れじゃなかったはず。そう思うのに、なぜか取り返しのつかないことを口にしてしまった気がしてならない。

同時に、なにがおかしいのだと冷静につつこむ自分もいる。だから雨音は頭のなかで鳴り響く警戒音を無視して、会話を続けた。

「えっと、そうです。まだみなさんに迷惑かけてばかりで……」

「そうか？ 紀藤はがんばってるって言ってたけどな。新入社員なんて、なにもできなくて当然なんだ。大きな失敗さえしなければ、大丈夫だと思っぞ？」

先輩から、にっこり笑つてのアドバイス。

失敗しないようにとびくびくすごしている身としては、ちよつと胸に沁みる。いまのユキヤからは、一瞬だけよぎった怖い気配は、みじんも感じない。雨音はほつと肩の力を抜いて、サイコロ状に切られたステーキを満面の笑みで頬張った。

「おいしいですねー。やわらかくてジューシーで、とろけそう！」

「お気に召していただいたようで、よかったです」

甘やかな笑顔でそんなことを言われ、いい気分にならないわけがない。

（昨日は強引な人だなと思っつたし、どちらかという硬い表情ばかりだったのに――。今日はなんか、雰囲気が違う）

男らしさと甘さが絶妙に入りまじる整った顔をした男性に、目の前で微笑まれる。そんな経験を、雨音はいままでしたことがない。さっきから心臓が高鳴って、なんだかふわふわと浮かびあがりそうな心地になる。

（そうか。きっと昨夜は時間が遅かったし、ユキヤさんも疲れていたんだろうな）

都合のいい解釈かもしれないけれど、よくあることだ。  
(わたしも就職したばかりの頃は毎日すぐく不機嫌だったって、凧人に言われたっけ)

両親と違って、弟の凧人ははつきりとした物言いをする。

慣れない環境に、初めての 대기업への就職。両音も疲れていたときは、きつと硬い顔をしていたのだろう。あるいは、もつとひどかったかもしれない。

(あ、もしかして……だから今日、お昼に誘ってくれたのかな？ でも——)

強引ではあったが、昨夜は送ってくれて助かった。

(本当はわたしがお礼をすべきなんだろうなあ)

とはいえ、こんな高そうな店で「昨日送ってくれたお礼におごります」とは、気楽に言えない。

(初めて会う人に、嫌われないようにしたいし……どうしよう)

そんなことを悩んでいるうちに食事が終わり、デザートが運ばれてきた。

ミルクフィューのバニラアイス添えとクリームブリュレ。違う種類のデザートが運ばれてきたのは理由がある。実はさつきメニューを選んでいるときのこと——

「ほら、両音。デザートはどうする？」

そう尋ねられても、両音は選べなかった。

「だってクリームブリュレも好きだし……ミルクフィューも気になる……でも……」

迷う両音に、ユキヤはくすくすと笑う。

「じゃ、とりあえずひとつずつ頼んでおこうか？ 現物を見て選ばせてあげる」

「う、いやでもそれは……」

お願いだから、そんな殺し文句を吐かないでほしい。

そう思ったけれど、ずっと悩み続けるわけにもいかないし、昼休みは有限だ。結局はユキヤが言うとおり、両方を頼んでもらい、両音は選択を先延ばしにしまった。

——けれども、デザートが運ばれたいまも両音は決めかねている。

どちらのデザートも赤や黄色のフルーツソースが添えられていて、おいしそうだ。

「うう……どっちも、おいしそうー。うー……でもブリュレ、ブリュレかな……やっぱ、ブリュレ」

「アイスが溶けそうなほど、熱い視線だな。そんなに気になるなら、また来ればいいだろ」

「え、う……でもデザートメニューは日替わりだって、お店の方が言ってたじゃないですか……また同じメニューが出るとは限らないし」

「じゃあ、とりあえず俺がミルクフィュー食べるから、両音はブリュレな」

そう言いながら、ユキヤにミルクフィューのバニラアイス添えをさつと取り上げられた。

「ほら、早く食べないと。一時には部署に戻るんだろ？ さつきつくく言っていたじゃないか」

「はっ、そうでした！」

我に返ると、目の前にデザート用のスプーンを差し込まれる。

「ん、ほら」

「あ、ありがとうございます」

なにからななまで、いいのだろうか。そう思いつつも、受けとったスプーンでブリュレをすくい、ぱくりとひと口。

「ふわとろで、あつまーい！」

なめらかな舌触りと口中にふんわりと広がる甘さに、目元も頬も緩む。

「そうか。よかったな。じゃ、こっちもどうぞ」

ユキヤが言うと同時に、バナラビーンズの甘い香りが漂った。目の前には、ミルフィーユとバナラアイスがバランスよく載ったフォークが差し込まれている。

「いや、で……っ」

でもと続くはずだった言葉は、口を開いたとたん押しこめられたフォークに封じられた。

「む、う……っぐ、あ、サクサクしたミルフィーユと香り高いバナラアイスが、絶妙なハーモニーを奏でて……って、そういう問題じゃないですよ、ユキヤさん！ いきなりなにをするんですか!？」

「んー？ だって、あんなに悩んでる姿を見たら、食べさせてあげたくなくなっちゃった。ダメ？」

「うう？ いや、その……」

「ダメ？」 だなんて――

首を傾げながら聞かれて、またしても頭が沸騰した。

ユキヤの顔を直視することができない。目を逸らすため手元に視線を落としても、じーっと視線を向けられている気がする。

（違う。そんなことない。きつとこれはわたしが自意識過剰なんだ！ ちよつとからかわれただけで、ユキヤさんが、ずつとわたしのことを見るわけがない。隣を意識する必要なんてないの。絶対、ユキヤさんは見てないんだから――）

自分自身に必死で言い聞かせていたのに、ちらりと視線を走らせると、ユキヤと目が合った。見られていた。そう確信し、またしても心臓が跳ねた。動揺するあまり、グラスに手をぶつけてしまう。がちゃんと音が鳴り、グラスが倒れた。

「わわっ。倒しちゃっ……」

ぱつと手を引いたとたん、グラスと反対側にいたユキヤの椅子とぶつかる。

「大丈夫、大丈夫。たいして水入ってないじゃないか。というか、残念だな」

「残念……？」

雨音の動揺をなだめるためか両肩に手が添えられ、軽く抱かれていた。けれども雨音は自分の失態に気をとられ、それを気にする余裕はない。

「これで水が盛大に零れて服が濡れてしまったら、服をプレゼントできたかなって」

「え？ ええっ!? プ、プレゼントって――や、だ、だから、そういうの、お、おかしいですよ？」

「なにが？」

なにが……デートのときに服を贈るという発想。自分が汚したわけでもない服のかわりを、プレゼントしようという度量。そのどちらも雨音の感覚ではおかしい。ユキヤにとっては、なんてことないのかもしれない。なんでもないのかもしれないけど――



（わたしはっ、慣れてないんだから、そういうの！ あんまりあたりまえみたいに言わないでよおっ！ デ、デザートだって……）

両音が混乱して固まっているうちに、ユキヤは両音の倒したグラスを直し、零れた水を拭く。そしてなにごともなかったかのように、デザートの残りに口をつけた。

両音はその姿に、ぎよっと目をむく。

「そ、それ……ッ、か、かんせ、つ……ッ」

同じフォークを使ったら、間接キスじゃないの!? とは口にできなかった。

「ん？ どうかしたのか、両音？」

ねっとりとした口調と誘うような流し目に、両音は悟った。

（わざとだ！ 絶対、わざとやったんだ！）

顔を真っ赤にしたまま震える。その理由がなんなのか、両音自身もよくわからない。

羞恥なのか、怒りなのか……。パニックを抑えようとスプーンを握り、デザートに手をつける。

ブリュレを食べようと思ったのに、ココット皿に震えるスプーンが触れて、カタカタと不自然な音を立てた。

（き、昨日会ったばかりなのに、なんで——なんでこの人、こういうの平気なの!? なんで!?）

顔は熱いまま、ぐるぐるとわけのわからない感情が渦巻いて止まらない。

この人、信じられない。なのにもっと信じられないことに、あまりイヤじゃないかもしれない。でも両音の一般常識としては、受け入れられない。

頭のなかで相反する感情が吹き荒れ、いつもなら一般常識に傾く思考がどうしてもまとまってくれない。両音は完全なるパニックに陥っていた。

一方のユキヤはいたって平静だった。なにごともなかったかのようにデザートを食べ終え、小首を傾げて両音を見ている。かわいらしくも見える仕種は、ある意味、凶悪だ。

「ん？ どうした？ もう十二時四十五分だぞ。とっとと食べないと一時に間に合わない」

彼はそう言って頭を軽くこづいてくる。おかしい。

どう考えても、おかしいのに——

混乱した両音は、震える指でブリュレを平らげること、いっばいっばいだった。

なんでフォークを替えなかったか、言っていることがおかしくないか。

そんなまともな反論を口にすることもできずに——